

常滑の朱泥龍巻の世界

はじめに

常滑が生産した輸出用陶器の「朱泥龍巻」は、近代以降の常滑窯業史を語る上で欠くことのできない陶製品のひとつです。朱泥龍巻の生産が始まった明治時代、日本は政府の主導によって、外貨の獲得を目的とした輸出用の陶磁器生産が盛んになっていきました。また、欧米で開催された万国博覧会への参加を通じて、日本の陶磁器が美術工芸品としての商品価値を持ち得ることが認知されました。常滑では、明治から昭和にかけて、国内向けに土管やタイルや衛生陶器を含めた建築陶器が、外国向けに食器や花器、置物等の陶製品が生産されました。本企画展では、明治20-30年代の僅かな期間のなかで制作された常滑の朱泥龍巻に焦点を当て、当時の技術や生産の背景を探ります。

朱泥龍巻の始まり

常滑の窯業を営む松本久右衛門の三男であった松本重信(1864-1950)が、明治15(1882)年に輸出用陶器への取り組みを開始したといわれています。当時18歳であった松本重信は、常滑の雅陶制作の第一人者であり、藻掛けの急須や備前風の花生を得意としました。彼は海外市場への販路拡張の必要性を痛感し、自作の急須や花生、壺を横浜へ運んで外国人商社に売り込んだという逸話も残っています。

常滑の輸出用陶器生産が本格化するのには、明治20年代に入ってからのことです。明治20(1887)年に浦川竹二郎(一斎)、杉江愛之助(寿山)等、輸出用陶器の生産を志す陶工たちによって龍工組が組織されました。彼らは、龍の意匠が外国人の嗜好に適していることを聞きつけ、朱泥の壺などに龍の文様を浮彫り状に巻き付けた「朱泥龍巻」を生産しました。

朱泥彩龍巻花瓶一双 松本重信 明治時代後半 〈とこなめ陶の森蔵〉

高 55.4 cm、口径 14.8 cm、胴径 27.8 cm、底径 14.4 cm

本作は、天を仰ぐ龍が立体的に装飾された一雙の花瓶である。龍は白マット釉が施され、さらに上絵付で加飾されている。龍のツノは取り外しが可能である。口縁部付近には型を用いて粘土を貼り付けた図柄に上絵付を施す等、これまで評価されてこなかった常滑の施釉技術の一端を知ることができる。



朱泥金箔押龍巻花瓶
杉江寿山 明治20年代
「大日本常滑龍工組」製
〈大岩泰彦コレクション〉

高 30.0 cm、口径 6.3 cm、胴径 12.8 cm、
底径 6.5 cm

本作は、胴部に雲龍が装飾された瓶子形の花瓶である。龍の部分は金箔が押され、頸部及び締腰部付近に上絵付けが施されている。朱泥龍巻は神戸で箔押しや漆引きされ、国外へ輸出された。本作はその実例を示す貴重なものである。

朱泥龍巻の生産背景

常滑の朱泥土は、幕末の安政元(1854)年に確立されたといわれ、専ら急須生産に用いられてきました。明治時代になると、花器や火鉢等にも朱泥土が使われるようになりました。龍の浮彫り状の装飾は、明治13年頃に松本久右衛門窯にいた職人の下田常次郎(生素)が創出したと伝えられています。明治45(1912)年に刊行された『常滑陶器誌』には、「朱泥焼に龍紋を浮出せる所謂龍巻は曩に貿易品として盛んに海外に輸出せしものは是れ下田生素の新案になるものとす」と写真付きで紹介されています。

最初の製作事例として知られるものは、「近代土管の父」と呼ばれる常滑の鯉江方寿(1821-1901)の龍巻文様のある植木鉢です。本作は、明治14(1881)年に開催された第2回内国勸業博覧会に出品され、花紋賞牌を受賞しました。

今回の展示には、「大日本常滑龍工組製」の角印と「寿山」の小判印が押された瓶子形の龍巻製品があります。龍の顔や鱗の微細な表現は、石膏型を用いてレリーフ状に成型した粘土を貼り付けたと考えられます。また、龍の周囲にある雲の装飾は、ヘラや指などで薄く粘土を盛り付け、ササラと呼ばれる竹や棕櫚等を束ねた道具で刺突を加えて表現されています。

朱泥龍巻は、最初に神戸に運ばれた後、一部は金箔や漆引きなどの二次加工が施されて海外へ船で輸送されます。輸出先はアメリカを中心に、イギリス、フランス、オーストリア、オーストラリア、中国、ロシアがありました。朱泥龍巻の器種は、火鉢・投入(ステッキ入)・蓋物・水指・土瓶・花瓶・植木鉢、鉢台・半胴・煙草壺・灰皿等と記載された史料が残っています。輸出先での使用法は明らかになっていませんが、史料からどのような形態の製品があったのか推測ができます。



朱泥金箔押龍耳蓮弁文壺
水川重斎 明治時代後半
〈大岩泰彦コレクション〉

高 31.3 cm、口径 3.4 cm、胴径 19.5 cm、
底径 11.3 cm

本作は、龍をモチーフにした双耳の長頸壺である。頸部上半及び胴部上半にみられる蓮弁文は下端部を削って作出している。龍及び蓮弁文の縁に金色の彩色が認められる。



朱泥龍巻六角形投入
「龍工組」製 明治20年代
〈大岩泰彦コレクション〉

高 51.7 cm、幅 24.3 cm、奥行 20.8 cm

躍動感にあふれる二匹の龍が装飾された六角形の投入である。ステッキ入と呼ばれる大型の製品で、本作は口縁部の下端及び底部の立ち上がりに雷文が押印されている。

おわりに

こうして始まった常滑の朱泥龍巻生産は、最初こそ珍奇な作風で一大ブームを巻き起こしました。しかし、変化の乏しい意匠や他産地との競争、流行の変化に対応できず、明治20年代後半には需要が低迷しました。その当時、常滑には27軒の窯元が朱泥龍巻の生産に関わっていたとされていますが、明治30年代後半には終わりを告げました。

近代における常滑焼の歴史のなかでは、苦い経験として語られる朱泥龍巻ですが、当時の常滑で培われた石膏や浮彫り装飾等の技術は、盆栽鉢や植栽鉢等の内需生産品に受け継がれていくことになりました。

(小栗康寛)



朱泥龍巻花瓶
「陶盛組」製 明治時代後半
〈大岩泰彦コレクション〉

高 20.3 cm、口径 10.9 cm、胴径 14.6 cm、
底径 11.3 cm

本作は、二匹の龍が左を向いてしがみついた珍しい構図を取る。石膏による薄い粘土を貼り付けて、頸部には「菊波文」、胴下部には「宝相華唐草文」が装飾されている。



朱泥龍巻小壺
作者不明 明治時代後半
〈大岩泰彦コレクション〉

高 18.5 cm、口径 5.1 cm、胴径 15.8 cm、
底径 7.8 cm

小ぶりの作品ではあるが、肩の張りだした部分に雲龍が装飾されることで、力強い印象を与えている。口縁から頸部は押印施文で空白部分を充填する。



朱泥龍巻鶴頸壺
「龍工組」製 明治 20 年代
〈とこなめ陶の森 蔵〉

高 25.0 cm、口径 2.5 cm、
胴径 10.3 cm、底径 8.9 cm

鶴頸壺は、龍の装飾が映えるためか朱泥龍巻の代表的器種として評価されている。龍の頭部から体部は膨らみのある胴部に、尻尾は螺旋状に頸部に巻き付けて躍動感を表現している。また、雲には龍を際立たせるために墨入れが施されている。



朱泥龍巻瓢形壺
作者不明 明治時代後半
〈大岩泰彦コレクション〉

高 27.6 cm、口径 3.2 cm、
胴径 13.5 cm、底径 7.6 cm

瓢単形のくびれ部以下のやや平坦な器面に龍を巻き付けている。本作のフォルムや直口する口縁形態から酒器としてつくられた可能性がある。

とこなめ陶の森 企画展 常滑の 輸出陶器 朱泥龍巻 の世界

Sugdeiri-Ryuumaki